

婦人科領域の画像研究, 教育, 臨床における優れた業績に高い評価

—RSNA Honorary Member 京都大学・富樫かおり教授インタビュー—

京都大学大学院医学研究科
放射線医学講座(画像診断学・核医学) 教授

富樫 かおり 先生

【略歴】

1979年, 京都大学医学部卒業, 滋賀医科大学附属病院放射線科医員。1987年, 京都大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。1989年, 大津市民病院放射線科を経て, 1992年, 京都大学医学部附属病院核医学科助手。1996年, 米国ハーバード大学放射線科客員助教授。1997年, 大阪赤十字病院放射線科。1998年, 京都大学医学研究科映像医療学助教授。2003年, 先端領域融合医学研究機構研究員, 特任助教授。2004年, 京都大学大学院医学研究科放射線医学講座教授。

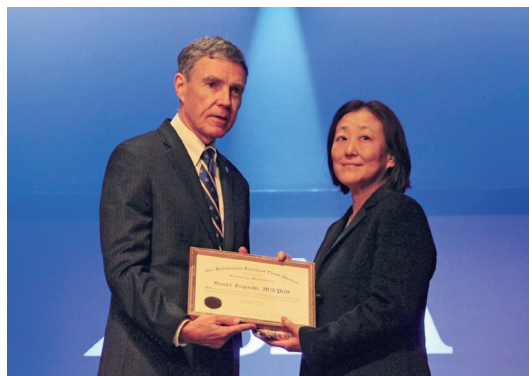


京都大学放射線医学講座・富樫かおり教授がRSNA2014のHonorary Memberに選出され, 学会2日目の12月1日にシカゴArie Crown Theaterで表彰式が行われました。RSNA Honorary Memberは, 放射線医学において多大な影響を与えた研究者に対して授与されるもので, 富樫教授の婦人科領域における研究が高く評価されました。今回, 富樫教授にご感想とRSNAの魅力などについてお話を伺いました。

—この度のRSNA Honorary Member ご選出
おめでとうございます。
まずはご感想をお聞かせください。

とても突然だったので非常にびっくりしたというのが正直な感想です。

過去にRSNA Honorary Memberに選ばれた方は, いずれも放射線分野で功績を残された高名な先生方であり, 一方私は若輩にて意外でした。しいて理由を考えるとすれば, 1986年から30年間婦人科領域MRI研究に携わり, 若手を育てる機会に恵まれた結果, 彼らの頑張りにて300近くの業績を得たこと, Radiology誌のReviewer, Education Exhibits Awards Committeeとして多くの時間を費やしたことなどが総合的に評価されたのかもかもしれません。非常に名誉なことであり光栄に感じています。



大会長N. Reed Dunnick氏より表彰状の授与
© INNERSION



表彰式にて選出理由と業績を紹介
© INNERSION

—先生のご専門分野とそれを目指すこととなったエピソードをお聞かせください。

1985年、大学に日本で2台目の全身用MRIが導入されたのがきっかけでMRIを専門に研究することになりました。当時MRIの主要な研究対象は中枢神経系であり、放射線科における画像診断の中心は上腹部でした。婦人科領域を積極的に研究されているのは世界的にも Hedvig Hricak先生だけだったかと思います。MRIによって今まで見えなかったものが画像化できたり、病理診断では組成がそれ程変わらない組織でもコントラストが異なっていたりという点が非常に興味深く、研究に専念していきました。1986年に高磁場MRにおける子宮頸がんのステージに関する論文をRadiology誌に発表したところ、婦人科の先生方から、良性疾患と悪性疾患を判別したいというオーダーが多く寄せられました。他の国では良性疾患にMRIはあまり施行されていませんでしたが、この領域の検査を多く行うことで研究の道筋が明確になりました。婦人科の先生方に感謝しています。

また、内膜症性嚢胞はMRIでの正診率が高いため、手術ではなく内分泌療法での保存療法が選択できるのですが、エビデンスに基づく臨床を行うため論文も多く発表しました。現場からの実際のニーズに沿って研究を行い、侵襲を少なくできることに画像診断の意味があります。

自分の領域が更に広がったのは、子宮が動いている臓器でありMRIで見えるのだということに気が付いて論文にしたのがきっかけです。動いているなら静止画像ではなく動画で診るべきではないかと。子宮の波様の動きである蠕動運動をMRで可視化でき、更に工夫することでそれが妊娠能や様々な症状と深く関連していることが判り、Radiology誌、JMRIに発表しました。

—国内外の学会でご活躍の先生から見たRSNAの魅力をお聞かせください。

RSNAは、研究に従事する世界中の放射線科医にとっての大きな目標であり、多くの同輩や指導者にめぐり会える場所でもあります。RSNAには1985年に初めて演題を提出したのですが、RSNAという国際学会で発表するのは最初で最後だと思っていました。ですが発表後に、当時の座長で現在はUNC

(ノースカロライナ大学チャペルヒル校)におられるJoseph K.T. Lee先生が実に気さくに「とてもよい発表だったよ」と励ましてくださったことが大きなきっかけとなり、それ以来30年にわたって毎年参加しています。その後もHricak先生や、当時ペンシルバニア大学におられた現在はRadiology誌のEditorであるHerbert Y. Kressel先生など、多くの世界的に著名な研究者の方々に指導やサポートをしていただきました。

また、オーラルのプレゼンターは無料ですし、若手のアカデミックラジオロジストを育てるコースを組むなどシステムも充実しています。人を育てようという意思ははっきり感じられる学会であり、それが最大の魅力と感じています。

—海外を目指しておられる若手研究者へ、豊富な国際経験よりアドバイスをお聞かせください。

一度はRSNAやSNM、ECRなどの国際学会で発表してほしいと思います。以前と異なり共同研究が多くなり単独の施設での研究は難しいと思いますが、英語論文で発表することで海外からの注目度が全く違いますし、やはり会場の雰囲気や緊張感を肌で感じることで刺激になると思います。

また、一度は留学してほしいと思います。同じ領域をやっている人はすぐ仲良くなる、まさに共通言語です。海外の人間関係という財産を築けますし、海外における自分の立場を感じることで、日本に留学している人たちの思いや多様性も理解できます。

—今後の抱負をお聞かせください。

現在は後進の教育が大きな命題です。

当放射線医学講座は、画像診断という手段を用いた臨床への貢献、研究の推進、教育を目指し日々努力を重ねています。その中で放射線科医には独立したサイエンティストであるとともに組織を支える人になってもらいたいと願っており、それぞれの目標を持って自由に切磋琢磨していく、そういう「人」が育っていくためのサポートをしていきたいと思っています。

—この度は誠にありがとうございました。先生のますますのご活躍を祈念しております。本日はありがとうございました。